

## 夫婦関係の質とコミュニケーション

### 学位論文内容の要旨

本論文のテーマは「夫婦関係の質」である。本論文の第1章で紹介されているように、これまで、夫婦関係の質に関して多くの研究が行われてきた。本研究は、これまでの研究の蓄積の中で指摘されてきた2つの問題に焦点を絞り、そのそれぞれについてより詳細な分析を試みたものである。

まず第1の問題は、夫婦関係の質（ないし夫婦関係への満足度の評価）に存在している、妻と夫との間のずれの問題である。夫婦関係について妻が感じている満足度は、夫が感じている満足度を下回るという事実が、これまで日本で行われた調査で繰り返し確認されているが、このような夫婦関係満足度に関する妻と夫との間のずれは、アメリカで行われた調査では見られていない。なぜ日本では、妻は夫よりも夫婦の関係により大きな不満を感じているのか、逆に言えば、なぜ夫は妻よりも夫婦の関係により満足しているのか——これが、本研究が取り上げる第1の問題である。

また、第1の問題に関しては、上述の夫婦関係に対する満足度のずれと同時に、もう一つのずれが存在することが、本研究の発端となった第1調査の結果から明らかにされている。すなわち、夫が妻の活動を実際に評価しているほどには、夫は自分のことを評価していると妻は思っていないという、実際の評価と、相手からの評価の予想の間の「ずれ」である。この、相手に対して持っている評価が、正しく相手に伝わっていないという「評価伝達のずれ」が、夫婦間の第2のずれとして本研究が取り上げている問題である。本研究では、第1のずれ——夫婦関係の様々な側面において、妻と夫との評価の間に存在しているずれ——を、「夫婦間での評価の乖離」と呼んでいる。これに対して、第2のずれ——一方の評価が他方に正確に伝わっていない——は、「夫婦間での評価伝達問題」と呼ばれている。

本研究が取り上げる第2の問題は、夫婦間のコミュニケーション行動と、夫婦関係の質ないし夫婦関係への満足感との関係であり、特に、夫婦関係における上述の2種類の夫婦間のずれ——評価の乖離と評価伝達問題——と、夫婦間のコミュニケーション行動との関係の問題である。より端的に言えば、夫婦間のずれは、夫婦間での適切な情報伝達の不足により生み出されているのか、それとも、それ以外の要因により生み出されているのかという問題である。この問題に関して、本研究では、社会的交換理論の立場から、夫婦間の会話を中心としたコミュニケーション行動のもつ意味について検討している。すなわち、夫婦間のコミュニケーション行動は、情報の伝達という機能だけではなく、「関心」という「心理的資源」の交換としての機能を果たしているという観点から、コミュニケーション行動が夫婦間のずれに対してもつ意味について検討している。

本論文の中心は、上述の2つの問題を検討するために学位申請者が3度にわたり実施した調査研究結果の分析にある。第1調査は1994年に実施され、札幌市内の124組の夫婦を対象にしている。第2調査は、札幌市内を中心とした177組の夫婦を対象に1999年に実施された。第3調査は、札幌市内と名古屋市内を中心とした300組の夫婦を対象に実施された。これらの調査の特徴は、妻と夫の双方に対して同じ質問を尋ね、同時に、相手がその質問に対してどのように答えるかを予想させている点にある。この方法を用いることで、夫婦間に評価の乖離が存在していることを示すだけでなく、

その乖離の大きさが如何なる要因と関連しているのかを分析することが可能となる。夫婦ペアを用いない従来の研究方法では、妻の回答の平均と夫の回答の平均の間に差が存在することは明らかにできるが、その差が如何なる要因と関連しているかを分析することはできない。この点が、本研究の一つの重要な特徴である。

3度にわたり実施された質問紙調査研究の結果は、本論文の第3章から第8章にわたって報告されているが、ここでは、そこで報告されている主要な結果についてのみ、その概略を紹介する。

- ◆夫婦関係に対する妻の満足度は、夫の満足度を下回る。この結果は、3つの調査で一貫して確認された。この差は、夫婦関係に対する満足度だけではなく、その他の評価項目でも見られた。一般に、夫に対する妻の評価の好意度は、妻に対する夫の評価の好意度を下回っている。但し、会話時間、一緒に取る食事の回数などの客観的行動に対する妻の回答と夫の回答との間には差が見られない。
- ◆上述の夫婦間での評価の乖離は、妻の就業如何に関わらず一貫して見られる。また、夫の収入等の人口学的変数も、評価の乖離の大きさと関連をもたない。
- ◆妻は、夫からの評価を過小に見積もっている。これに対して、夫の場合には、妻からの評価を過小に見積もる傾向があまり見られない。妻による夫からの評価の過小見積もりは、夫婦関係に対する満足感のみではなく、相手が自分に対して持つ好意度の見積もり一般に見られる。
- ◆上述の夫婦間での評価伝達問題に関しても、妻の就業如何に関わらず一貫して観察される。また、夫の収入等の人口学的変数に関しても、評価伝達問題の大きさと関連をもたない。
- ◆会話時間は、夫婦関係に対する妻の満足度とは常に関係しているが、夫の満足度とは関係していない場合がある。
- ◆会話時間は、夫婦間での評価の乖離の大きさと関連している。会話時間の長い夫婦ほど、夫婦間での評価の乖離が小さくなる。サンプル全体を会話時間の長さで上位 1/2 と下位 1/2 とに分けると、上位 1/2 では、評価の乖離は見られない。このことは、日本人の夫婦に特有の評価の乖離が、実は、会話時間が短い夫婦に特有の現象であることを意味している。
- ◆会話時間は、夫婦間での評価伝達問題の大きさととは関連していない。妻が夫からの評価を過小に見積もる傾向は、会話時間が長くなっても変化しない。このことは、会話時間が必ずしも夫婦間での相互の評価の伝達に役立っているわけではないことを意味している。
- ◆夫が家庭に対していただく関心の大きさは、夫婦関係に対する妻の満足度と夫の満足度の双方と正の関連をもつが、夫婦間での評価の乖離の大きさととは関係していない。この結果は、日本社会に強く残存する性別役割意識が夫の関心を家庭に向けさせるのを阻害し、そのために妻が夫婦関係に対して不満を感じることになるとする、日本における夫婦間での評価の乖離現象についての解釈と一貫しない結果である。

以上が、本論文で紹介されている主要な知見の概要である。なお、調査結果の報告をその内容とする第3章から第8章にかけてが本論文の中心であるが、それ以外の章に関して、ここで簡単に紹介しておく。序論では、本研究で取り上げる問題に関しての大まかな説明と本論文の構成についての概要が説明されている。その後第1章「夫婦関係の質に関するこれまでの研究」では、本論文の中心テーマである夫婦関係の質を扱ったこれまでの研究を検討し、本研究で取り上げる2つの問題の意義を、既存研究の文脈の中に位置付けている。続く第2章では、本論文で紹介されている、学位申請者が実施した3つの調査研究の具体的内容についての紹介が、それぞれの調査ごとに行われた後、3つの調査で用いられた変数のうち、一貫している変数と異なっている変数についての説明がなされている。最後の第9章は総合考察にあてられ、第3章から第8章にかけて紹介された調査結果の分析の意味が検討されている。

# 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 山 岸 俊 男

副 査 教 授 瀧 川 哲 夫

副 査 助 教 授 高 橋 伸 幸

## 学 位 論 文 題 名

### 夫婦関係の質とコミュニケーション

本論文は、夫婦関係の質、特に夫婦のそれぞれが夫婦関係に対する満足感に見られる2種類のずれに焦点を当て、夫婦関係の主観的評価に夫婦間でずれが見られる原因を、学位申請者が実施した3つの調査研究の結果を基に考察したものである。本研究で取り上げられた第1のずれは、夫婦関係に関して妻が感じている満足度が、夫が感じている満足度を下回るという、夫婦間での関係の質(夫婦関係満足度)の評価におけるずれである。また、第2のずれは、夫が妻の活動を実際に評価しているほどには、夫は自分のことを評価していると妻は思っていないという、実際の評価と、相手からの評価の予想の間の「ずれ」である。

本論文の中心は、上述の2つのずれの問題を検討するために、学位申請者が3度にわたり実施した調査研究結果の分析にある。これらの調査の特徴は、妻と夫の双方に対して同じ質問を尋ね、同時に、相手がその質問に対してどのように答えるかを予想させている点にある。この方法を用いることで、夫婦間に評価の乖離が存在していることを示すだけでなく、その乖離の大きさが如何なる要因と関連しているのかを分析することが可能となる。夫婦ペアを用いない従来の研究方法では、妻の回答の平均と夫の回答の平均の間に差が存在することは明らかにできるが、その差が如何なる要因と関連しているかを分析することはできない。この点が、本研究の一つの重要な特徴であり、以下に紹介される本研究の成果も、この方法を用いることではじめて明らかにされた結果である。

本論文の成果は、まず第1に、夫婦ペアデータを用いた調査を実施することで、以下に諸点を明らかにした点にある。

①夫婦間の評価の乖離は、夫婦関係に対する満足度に関してのみではなく、相手に対する評価一般に見られる現象であることを明らかにした点。

②夫婦間に、これまで知られていた評価の乖離が存在するのみではなく、相手からの評価を低く見積もるという評価伝達問題も存在することを明らかにした点。すなわち、妻は夫婦関係や夫に対して夫よりも低い評価を下しがちであると同時に、夫が実際に評価しているよりも、夫は夫婦関係や自分のことを低く評価していると過小に見積もる傾向があることを明らかにした点である。この点は、これまでの研究では指摘されておらず、申請者が始めてその存在を明らかにした点である。

③夫婦間の評価の乖離の大きさが、会話時間と密接に関連していることを明らかにした点。会話時間が夫婦間の評価の乖離を低下させるのは、会話時間が主として妻の満足感を上昇させるからである。この知見は、夫婦ペアデータを用いることで始めて明らかにすることができた点であり、ペアデータを用いた本研究の意義を明らかにしている。

④一方、会話時間は、妻による夫からの評価の過小見積もりとは関連していないことを明らかにした点。この結果は、会話時間が、夫による評価を妻に正確に伝えるという、情報伝達の役割をほとんど果たしていないことを意味している。上の③の結果と、この④の結果を総合すれば、夫婦間の会話時間は、情報伝達以外の機能を夫婦間で果たしており、その機能のゆえに、妻による夫婦関係に対する満足がもたらされた、という結論が得られる。

以上の結果は、理論的には、会話時間に代表される夫婦間のコミュニケーション行動が、情報伝達の手段としての役割以上に、「相手に対する関心」という心理資源の交換としての役割を果たしている可能性を強く示唆している。本研究全体の理論的背景は社会的交換理論であり、物質的資源の交換のみではなく、相手からの思いやりや関心などの心理的資源の交換関係が、夫婦関係に対する満足に大きな影響を与えているとするこの結果は、夫婦関係の質に関する社会的交換理論からのアプローチの意義を明確に示すという重要な貢献をなしていると言える。この点に、本論文の重要な理論上の貢献がある。

上述の研究成果のうちの①を除く他の3つは、本研究がはじめて明らかにした知見であり、本研究が独自の貢献をなすオリジナリティーの高い研究であることを示している。また、これらの結果を総合的に検討することで、夫婦関係に対する満足度に対して、夫婦の会話時間が情報伝達の手段としての役割よりも、心理資源の交換としての役割をより強く果たしている可能性を示したことは、社会的交換理論からの夫婦関係の分析に新しい観点を導入したものであり、本研究がもつ重要な理論的貢献である。本審査委員会は、これらの貢献と研究のオリジナリティーを評価し、全員一致で、本論文を博士(行動科学)の学位を授与されるにふさわしいものであるとの結論に達した。